



循環器疾患ディベートⅡ

佐々木達哉 著

● A5変 頁228 2018年8月

定価：本体3,500円＋税

[ISBN 978-4-8157-0129-1] MEDSi 刊

豊富な診療の経験があり、論文を読んで書いて、臨床の風潮の変遷を眺めてきた著者が循環器疾患の「ものの考え方」について思うところを著した本である。テレビや映画で見る裁判風景を「循環器診療のさまざまなテーマ」に当てはめて、原告と被告側がやりとりをするのに似ている。著者は陪審員でもありレポーターでもある。読者は画面を見ている立場として、いずれかの説に共感することもあれば、以前通りの困惑に取り残されたままかもしれない。

普通の著者には書けない。普通の専門家はこの著者ほどしぶとい性格ではないし、全体像を把握できない。著者ほどに自分の頭で考える集中力はなかなかに得がたい。

3タイプのテーマで構成されている。1)年季の入ったテーマ、2)最近の話題、3)面白みをねらった話。

1)年季の入ったテーマ：「アスピリンの一次予防の意味」「無症候の高尿酸血症の治療の可否」「中性脂肪の治療の価値」などは、このところ話は尽きないような、尽きたような話題であり、「ならばいかに」と1歩踏み込んだ話を聞くのは楽しい。

2)最近の話題：「SGLT2 阻害薬と心疾患」「PCSK9 の使い方」あたりか。

3)面白みをねらった話：「薬でHDL をあげる意味」「歯磨きとIE」「過換気症候群のペーパーバッグの治療はだめだ」「中心静脈のアプローチ」。詳しく知らなかったが、著者らしい面白さがある。

1 個の臨床試験を知って、すぐに信用してしまうような素直な人には向いていない。「この治療がいい」と「この治療はだめ」という混沌が世の常態だと思っている疑り深い循環器科医だったら楽しんでもらえると思う。

デメリットもある。内容ではない。「読みにくい」ことだ。

1)本文の字が小さい。さらに小さなポイントの部分もある。いい年をした医師に「内容的にはピッタリ」なのに、老眼鏡を書けないと読みにくい。50 歳以上の医師も格好の読者だと思うのだが。

2)「賛成意見の pro」と「反対意見の con」が順番に書かれているが、さらなる小項目に分けられていない。ぎっしり書かれている。行間も狭く、段落の置き方も少ない。

3)冒頭でも最後でもいいが結論がどこにあるかわからない。少なくとも各テーマの全体を読まないと理解したとは言えないので、あえて結論や意見が一見してわからないようにしてあるのかもしれない。著者の性格でわざとそうしているのだろうか。世の中の読者は隅々まで読みこなせないのも、しきいを高くしている。

最後になるが、コラムに統計の基本が綴られている。簡単に読めてためになる。

「濃い本」だ。